

第 20 回「理学療法ジャーナル賞」授賞式開かれる

準入賞に西村氏、桑田氏、奨励賞に山田氏

第 20 回「理学療法ジャーナル賞」授賞式が、4 月 18 日、医学書院会議室にて行われ、受賞者に賞状、賞金 hands 渡されました。「理学療法ジャーナル賞」は、本誌に 1 年間に掲載された投稿論文のなかから優秀論文を編集委員会が顕彰し、理学療法士の研究活動を奨励するものです。昨年(2008 年)は、総投稿数 125 本のうち 18 本が掲載となり、下記 3 論文が第 20 回「理学療法ジャーナル賞」に選ばれました(「入賞」は該当なし)。

〔準入賞〕

① 西村由香・他(北海道文教大学人間科学部理学療法学科)「高齢遺体の肩関節包内滑膜の変化と関節軟骨の変化およびその関係」(第 42 巻 1 号掲載、原著)

② 桑田稔丈・他(熊本機能病院総合リハビリテーション部)「回復期リハビリテーション病棟における脳卒中クリティカルパスの入院 1 か月時点での達成目標」(同 2 号掲載、報告)

〔奨励賞〕 山田 実・他(坂田整形外科リハビリテーション)「Dual-task バランストレーニングには転倒予防効果があるのか?—地域在住高齢者における検討」(同 5 号掲載、報告)

* * *

準入賞の西村論文は、高齢遺体の 118 肩を詳細に観察分析したものであり、肩関節包内滑膜の変化とその変化の分布状態を分析、また軟骨の変化の特性を示して、滑膜と軟骨の変化の形態的差異を理学療法の視点で考察した解剖学的研究であることが高く評価されました。

もう 1 つの準入賞の桑田論文は、臨床でよく用いる障害老人の日常生活自立度判定基準(自立度)と機能的自立度評価法(FIM)の経時的変化から、自宅退院となる移動能力を獲得するには、入院 1 か月時点での自立度と FIM がどの程度必要であるかを検討したもので



左から、西村氏、桑田氏、山田氏

す。回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中 229 例を分析した臨床データを基に機能予後を推測する臨床研究が評価されたものです。

奨励賞の山田論文は、虚弱高齢者 65 名を対象にして、転倒予防の効果的なトレーニングのあり方を論じた内容であり、研究デザイン、論文構成が評価されました。

編集委員会を代表して講評された鶴見隆正氏(神奈川県立保健福祉大学)は、「3 名の受賞者の論文には、臨床活動のなかに生じた様々な現象に対する疑問や気づきを探究しようとするリサーチマインドが込められており、日々のひた向きの臨床への取り組みが伝わってきます。臨床研究を実施するには、職場のスタッフの臨床力を集約して研究目的やアプローチ方法を共有することが大切で、それはスタッフ全体のリサーチマインドを高め、団結心と臨床力の方向性を導き出す契機にもなるだけに、各職場単位で臨床研究が活発に行われることを期待しています。本日受賞された論文をさらに発展させて、わが国の理学療法界の学術的、社会的な向上、発展に結びつけていただきたいと願っています」とコメントされました。

* * *

本年も 12 号までに本誌に掲載された論文のなかから第 21 回「理学療法ジャーナル賞」が選ばれます。読者の皆さまからの活発なご投稿をお待ちしております。